（2）金沢市新竪町地区における地域課題の把握と観光地化への対応

丸谷 耕太・福井 汐里

１．はじめに

（１）研究の背景と目的

近年，観光促進による地域経済の活性化および地域コミュニティの醸成が期待されている。一方で，観光者の増加は地域住民の静かな暮らしに影響を与えるという問題が注視されるようになってきた。このような状況で，地域住民は自らの持続的な生活を実現させるために，現在の問題を把握し解決するための地域づくりが必要となる。

そこで，本研究では地域の課題を把握しつつ，今後計画されている開発に対して住民が望む都市の将来像との接合を図ることを主たる目的とし，住民が抱える問題の把握および今後の地域づくりの方針を把握する。本調査の結果を住民と共有し，今後の地域における住民主体のまちづくりに必要な基礎的データとして提示することも目的の一つである。

（２）研究の対象と方法

本論では，研究の対象地を金沢市の新竪町地区とする。この地区は金沢 21 世紀美術館などの県内有数の観光資源と住宅地が混在した地域であり、多くの公共施設が存在する。それら公共施設の創設や移転が時代とともに何度も繰り返される地区であり、地域資源の変化が住民への生活に影響をきたしていることが予想できる。

そこで，新竪町地区におけるまちづくりの方向性を定めるため地区内の全世帯に対してアンケート調査を行った。概要を表１に示す。調査票は公民館から各町会長を通じて町内世帯へ配布した。

表１：アンケート調査の概要

【住みよいまちづくりのためのアンケート】	
(対象)	新竪町地区の住民のべ1683世帯
(質問項目)	地区の現状、防災、子どもに関する質問、観光、公共施設など
(調査方法)	アンケート調査
(回収時期)	2019年11月15日～12月10日
(回収数)	484部(配布数：1683部)
(回収率)	28.8%(有効回収率：27.1%)

２．新竪町地区の概要

（１）新竪町地区の人口

新竪町地区は石川県金沢市の犀川の右岸、金沢城の南西側に位置する地区である。人口は 3971 人（うち男 : 1885 人、女 : 2086 人）であり、2220 世帯が地区内に存在している[1)]。

新堅町地区は０歳から４歳までの人口構成比が 2.3%，5 歳から 9 歳までが 2.4%，10 歳から 14 歳が 2.7%である。年代別人口比を金沢市と比較すると（図２），新堅町地区では若年層の人口割合が非常に低いことが分かる。また、高齢人口においては、新堅町地区では 65 歳から 69 歳の人口構成比が 8.6%、70 歳から 74 歳が同じく 8.0%、75 歳から 79 歳が 6.8%となっており、金沢市の数値と比較して非常に高い。

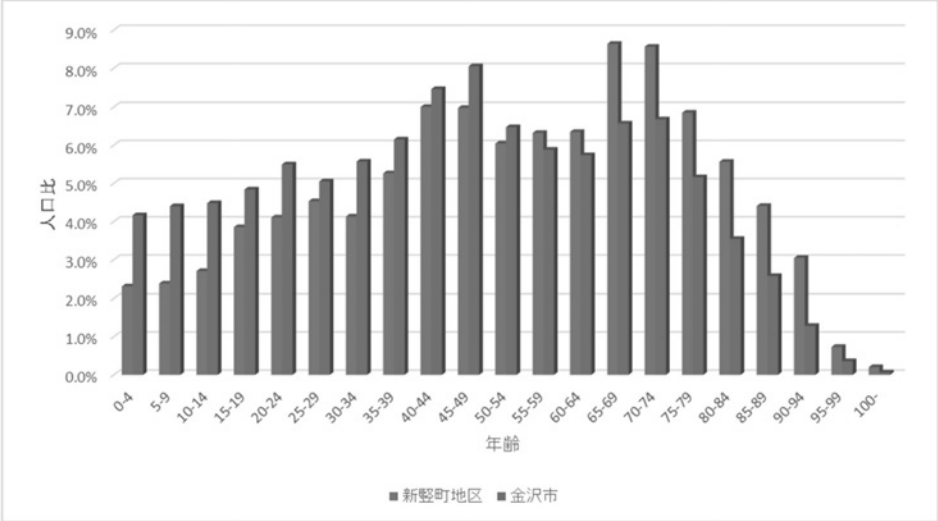

図１：金沢市の年代別人口比と新堅町地区の年代別人口比の比較

新堅町地区の人口については、1945 年から 1955 年については人口が増加しており、13936 人となっている（表２）。しかし、1955 年以降人口は減り続け、2019 年には 3971 人となり、ピーク時の 1955 年に比べ 71.5%減少している。世帯数については、1945 年から 1960 年にかけて増えており、1960 年の世帯数は 3741 世帯にも上っていた。一方で、1960 年以降は 1990 年と 2015 年を除き人口は減り続け、2019 年は 2220 世帯に縮小している。これは ピーク時である 1960 年より 40.6%の減少である[2)]。

表２：新堅町地区の人口推移と世帯数の推移

年	1945	1950	1955	1960	1965	1970	1975	1980
人口	11429	13801	13936	13401	11913	9966	8623	7530
世帯数	2947	3496	3524	3741	3544	3392	3274	3090
年	1985	1990	1995	2000	2005	2010	2015	2019
人口	6992	6507	5984	5286	4619	4301	4163	3971
世帯数	2977	3002	2883	2632	2281	2230	2267	2220

（２）新堅町地区における町会

新堅町地区には 36 の町会が存在する。校下町会連合会は 1954 年に発足しており、当時はちょうど戦後の模索期であったため、配給物の連絡・配分・運搬などをはじめとして生活全般に関与するような役割を担っていた 。現在は各種団体との総括や負担金の配分、レ

クリエーション活動など町会長を中心として行っている。

新竪町公民館の設立にあたっては、戦前に新竪町善隣館で社会福祉事業に積極的に参加していた人々が先頭に立って協力していた。新竪町善隣館は 1943 年（昭和 18 年）に完成し、愛育事業や教化事業など社会教育に向けての取り組みを行っていた。その中、1947 年（昭和 22 年）の教育基本法公布によりその第 7 条に公民館の設置が謳われ、公民館の役割が重要視された。ここから金沢市も善隣館や警防会館等の建物を利用して公民館の設置に動き出し公民館の誕生が進んでいった。新竪町公民館も 1952 年（昭和 27 年）に新竪町善隣館内に設置され、現在も運営されている[3)]。

（３）新竪町地区の施設の変遷

新竪町地区の主な施設の変遷を表 3 に示す。新竪町地区では公共施設や文化施設が何度も建設と移転を繰り返していることがわかる。特に大きな変化は 2003 年の石川県の庁舎の鞍月への移転であろう。新竪町地区の複数の町会連合会では、中心市街地の空洞化の危機感を覚え、移転反対の署名活動なども行われていたが移転は実行された。現在、旧県庁舎は一部保存されてしいのき迎賓館となり、レストラン・カフェ、会議室、ギャラリーなどの憩い・交流の空間を備えた施設として利用されている。

また、教育施設について見ると、1976 年に児童館が移転しており子供の遊び場が徐々に減少していっていることがわかる。そして 2019 年には新竪町小学校は菊川小学校と統合し、犀桜小学校となっている。この小学校の跡地利用は現在地域住民の課題となっている

文化施設については、2004 年（平成 16 年）10 月に金沢 21 世紀美術館がオープンし、2018 年度の来館者数は 250 万人を超え、県内の主要な観光地となっている。現在は石川県立図書館の移転が予定されている。地区内の学習の場として、そして憩いの場として利用していた住民に対する影響は大きいものと思われる。

このように、新竪町地区では県内でも有数の公共施設が時代とともに創設と移転を繰り返し、住む時代によって存在する施設は全く違うという特色があるといえる。今後もそのような創設と移転の繰り返しが予想される中で、どの世代の人も満足できるような地区にするために何かを作るとするならば、時代の先を読んでいく必要性が大きいといえる。

表３：新竪町地区の変遷

年	出来事
1922	金沢市庁舎が広坂通りに竣工（トンガリ屋根）（レンガ造り）
1924	石川県新庁舎落成式（鉄筋3階建て）
1926	新築の知事校舎を横山男爵邸跡の柿木畠（現広坂1丁目）に完成
1930	新竪町小学校が現在地に校舎増改築し落成
1931	副知事公舎が広坂一丁目に設置
1937	石川県立第一中学校の新校舎が富樫町（現在の泉野出町3丁目）に完成して、本多町から移転（現金沢泉丘高等学校）
1943	新竪善隣館が落成式を挙行
1946	GHQ群政部設置（下本多町）
	県立工業高等学校から出火して420坪消失
	私立金沢女子専門学園（現金沢学院大学）が開校（出羽町・旧師団兵器庫跡）
	金沢美術工芸専門学校（現金沢美術工芸大学）が開校（出羽町・旧師団兵器庫跡、現県立歴史博物館）
1947	北陸学院中等部・金城中学校・金沢大学教育学部附属中学校が創立
1949	金沢市立野田中学校創設（新竪小通学校）
	金沢大学教育学部附属中学校創設
1956	広坂通り～鱗町線が完成
1958	金沢市庁舎新館が完成
	石川県農業会館が下本多町に完成し落成式が行われる（現北陸放送会館）
1959	広坂公園（出羽町１番丁）の旧師団長官舎を石川県児童会館として開館する。
	新竪町小学校、新校舎起工式を挙行する。
1960	善隣館が新竪寮（学生寮）を開設
1961	県東庁舎(旧石川県警察本部)が建つ
	市立城南中学校(菊川校下)が開校
	豪雨により犀川桜橋の一部が流失する
	台風18号により犀川大橋の堤防が決壊、池田町・十三間町・大工町・竪町・河原町・蛤坂一帯が床上浸水を被る
1962	金沢市観光会館を下本多町六番丁に作る
	広坂二丁目に県婦人会館として建設され1979年12月、教育庁舎として石川県教育委員会が設置される
1964	新竪小学校、新校舎落成式を挙行
	住居表示の変更実施（幸町・菊川2丁目・本多町2丁目・本多町3丁目）
	豪雨により犀川下菊橋が流失する
	本多通りが開通
1965	広坂合同庁舎が完成
1966	住居表示の変更実施（広坂2丁目）
	石川県社会教育会館（県立社会教育センター・県立図書館）が本多町3丁目に開館
	金沢市消防本部・広坂消防署の合同庁舎が広坂2丁目に完成
1967	北陸学院中学校が飛梅町に移転
1968	北陸学院小学校が三小牛町に移転
	北陸放送MRO開館の落成式が行われる
	広坂二丁目の金沢大学理学部（旧四高等学校）跡地に、石川県立近代文学館および石川県立郷土資料館が開館
1969	新桜坂が開通
1970	広坂公園にあった石川県立児童館が広坂1丁目（旧北陸学院高等部）に移転し天体観測プラネタリウムが創設
	金沢市中央公民館が開館する（下本多6番丁）
1971	犀川大通りが開通（鱗町～片町間）
1972	広坂2丁目に石川県中央公園が完成
	金沢市美術工芸大学が出羽町3丁目から小立野5丁目に移転し、竣工式が行われる
1975	中村記念美術館が本多町3丁目に開館
1976	石川県立児童館が移転
	新竪町小学校プール（25メートル）竣工
1978	広坂1丁目の石川県児童会館のプラネタリウムが法島町に移転
1979	新竪町小学校が竣工する
1980	石川県農業会館が本多町3丁目から古府町に移転する
1983	兼六園内にあった石川県立美術館が、出羽町2番丁に新石川県立美術館として完成し開館記念式典が行われる
	金沢身術工芸大学が出羽町3番丁からの移転に伴い、石川県はこの地に広坂2丁目にあった石川県郷土資料館を移転
1986	桜橋に展望台付き自転車・歩行者道路が完成
	石川県立歴史博物館が出羽町3番丁（旧金沢美術工芸大学）に開館
	竪町商店街街路改善事業（メインストリート450メートル・幅6メートルに拡張・電線地下埋設）が完成
1988	寺町3丁目の犀川に面する北側の崖が崩れ。、市道（清川町）が50mにわたり土砂で埋もれ交通が遮断
	新竪善隣感を取り壊し、新しく新竪開館建設の起工式が行われる
	下本多町に金沢中警察署が落成し、広坂2丁目から移転開署する
1989	新竪会館落成式および新竪町公民館起工式が挙行
2001	金沢21世紀美術館の起工式が広坂1丁目の旧金沢大学教育学部附属幼稚園小中学校の跡地で挙行
2002	鱗町交差点、地下道入り口四箇所のフード新設工事が完成
	広坂二丁目にあった石川県庁が、鞍月一丁目に建設され落成式が行われる

３．新竪町地区の課題と住民の意向

本章では新竪町地区における課題と住民の意識を把握したアンケート調査の結果を示し，その傾向を分析する。

（１）回答者の属性

アンケート回答者の年齢構成を図２に示す。回答者は 70 代が 121 名と最も多くなっており、60 代以上の回答者が 69.1%を締める。男女比は男性が 42.0%、女性が 56.6%となっている。３０年以上居住している割合が 60.8%を占める結果となった（図３）。家族構成については図４に示したように、単身と夫婦のみ世帯が 49.4%を占める結果となっている。また親子で住んでいる世帯は全体の 38.2 %となり、比較的少人数の世帯が多くを占めている。

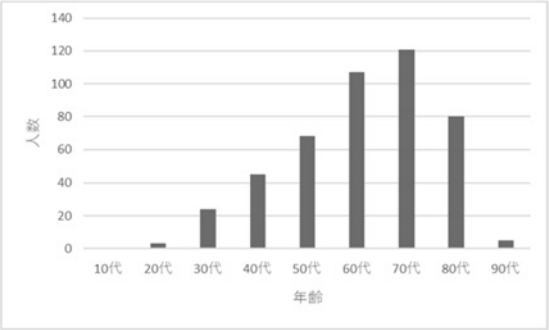

図２：回答者の年齢構成

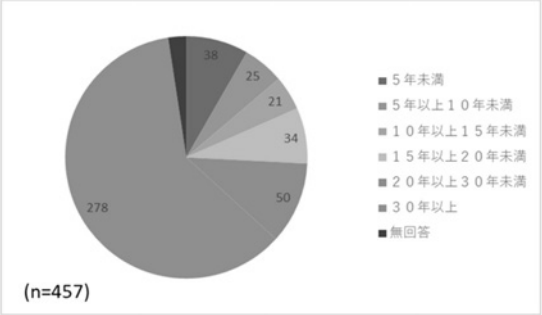

図３：回答者の居住歴

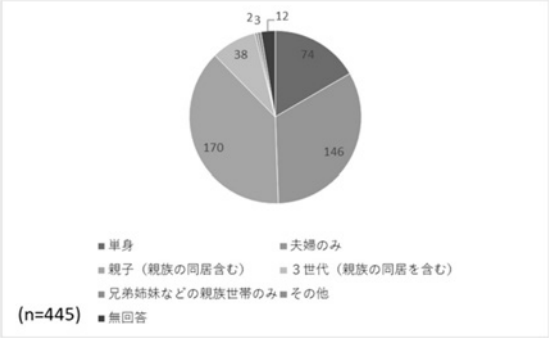

図４：回答者の家族構成

（２）新竪町地区の現状に対する満足度

新竪町地区の現状について，各項目５段階評価で満足度を尋ねた。結果を図５に示す。

住民の半数以上が満足している項目は、「交通の利便性」「ゴミ等の収集状況」「河川・水路の整備状況」「騒音・大気汚染・悪臭等の問題」「自然環境の保全」「下水の排水状況」「近所付き合い」「地区の治安」の項目であった。

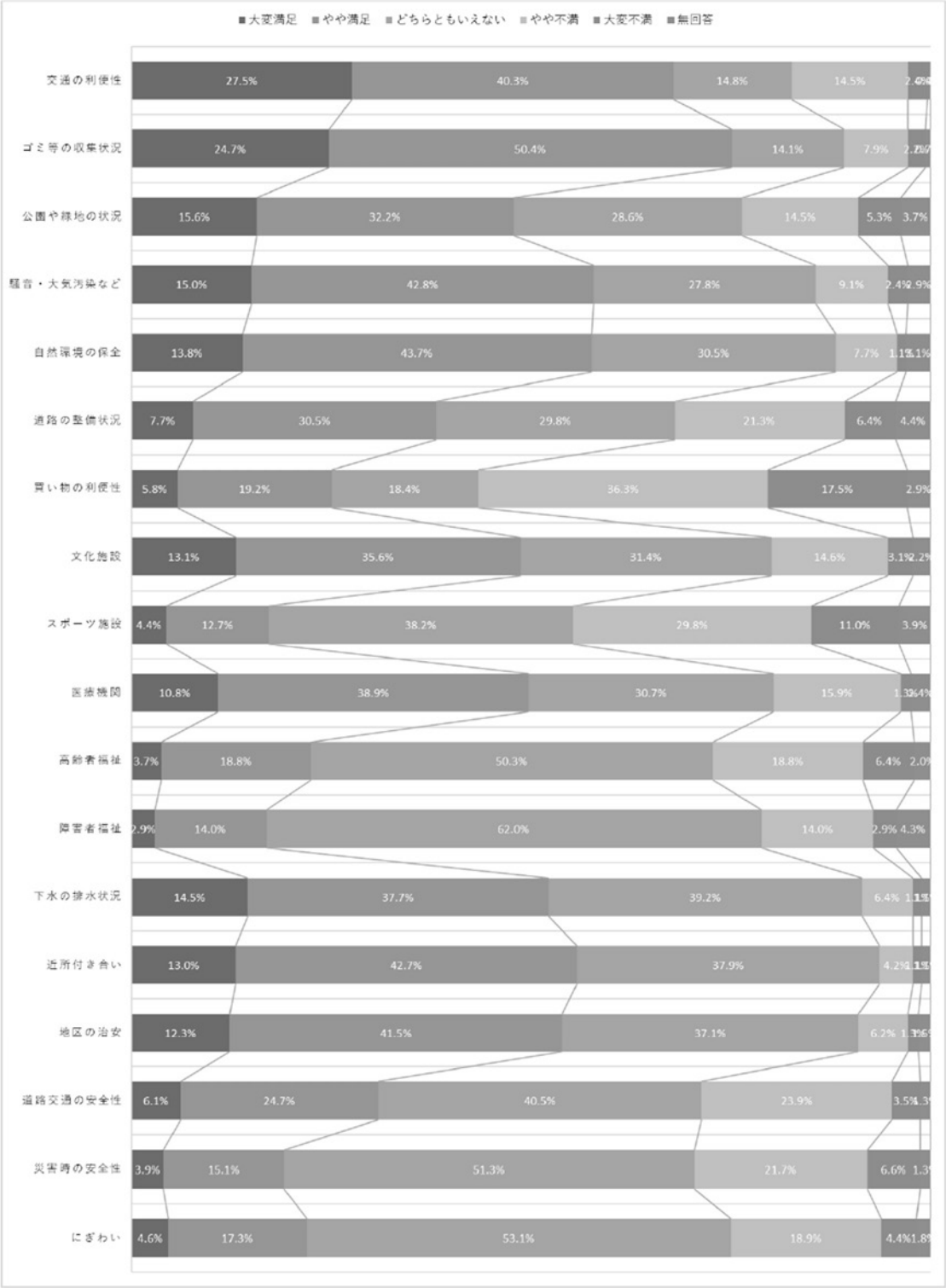

図５：新堅町地区の現状に対する満足度

「交通の利便性」について，新竪町地区は金沢の中心に位置しているため、バスなどの公共交通機関が充実していることから現状に満足していることを示す「大変満足」及び「やや満足」が全体の 67.8%を占めたと考える。また、「ゴミ等の収集状況」及び「騒音・大 気汚染・悪臭等の問題」、「近所付き合い」、「地区の治安」が住民から多くの満足度を得ているという結果から、地区内の結びつきや協力性が高いことがうかがえ、町内会の役割が整えられている特徴が表れている。

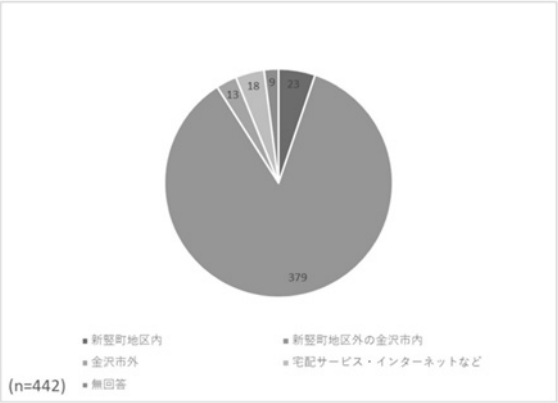

図６：日常の買い物をする場所

一方住民の半数以上が不満に思っている項目は、「日常の買い物の利便性」であった。現在、新竪町地区内で歩いていける距離に日常の買い物ができるスーパーマーケットがないことは多くの住民の悩みとなっている。約 85.7 の人が新竪町地区外で日常の買い物をしており、大多数の住民が日常の買い物のために時間をかけて移動していることがわかる。

また、「道路の整備状況」及び「スポーツ施設（体育館など)」、「道路交通の安全性」、「地震や大雨などの災害時の安全性」の項目も比較的不満と考える割合が大きかった。道路に関する項目については上述したとおり、融雪装置の未導入などの意見も多かった。「スポーツ施設（体育館など)」については、新竪町地区内には大人や子どもが遊ぶことができる施設がないことが原因であると考える。特に雨天時の遊び場所について不満に思う人が多かった。「地震や大雨などの災害時の安全性」については、新竪町地区は犀川に隣接しており、川の氾濫による浸水の危険性もあるため、住民の危機意識が表れていると考えられる。

（３）地域の防災と意識

住民の防災意識についての調査を行った。新竪町地区は犀川に隣接しているため、水害への対策は重要視しなければならず、また、地震などの災害時も狭く複雑な道路が問題を引き起こす可能性が高い地域である。そのため、防災に関する対策が重要な地域と言える。この結果については以下のようになった。

まず、避難場所の認知状況について結果を図７に示す。「知っている」かつ「避難する自信がある」と回答した人は半数を超えているという結果になった。また、「知っている」が「避難する自信がない」と回答した人は 3 割を超えている。避難場所の認知状況は非常に高いものの，実際に避難するとなると自信を持てない，又は避難場所自体認知していない人が 全体の 4 割以上を占める。

次に避難場所の妥当性についての結果を図８に示す。「適切である」と「どちらかと言うと適切である」の 2 つの回答者は合わせて全体の約 47 %という結果になった。これらの

理由としては、「自宅から近さ」が 44%を占めている。一方で「多少不安に感じる」「適切な場所だと思わない」の 2 つの回答者は合わせて全体の約 39%であった。その理由として最も多かったのは、避難場所が川に近いことなど、水害時の危険性が高いと考える意見であり全体の約 34 %を占めた。また、自宅から遠いという意見が約 15 %を占め、避難場所が適切であると考える人が多いが、それらは比較的自宅から避難場所が近い住民による意見が多い。現在の避難場所について不安をいだいている人も多くいることが確認された。

実際に水害が起きたときに避難場所自体が浸水予想地区に指定されている事も含め、実際に水害が起きたときに避難場所自体が浸水予想地区に指定されている事も含め、避避難場所の妥当性については再検討が必要であると考えられる。難場所の妥当性については再検討が必要であると考えられる。

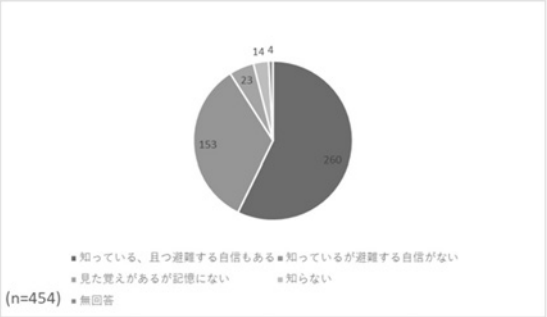

図７：避難場所の認知状況

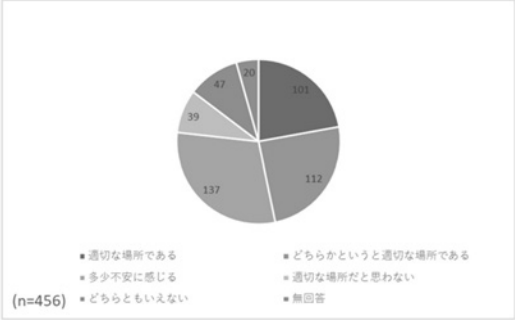

図８：避難場所の妥当性

最後に防災グッズの準備状況について図９に示した。「十分に準備している」及び「十分とは言えないが準備している」と回答した人は全体の 64.0%であり、半数以上が何らかの準備をしていることが分かった。また、「全く準備していない」と回答した人は全体の 34.9%であり、少ないとは言えない状況であった。

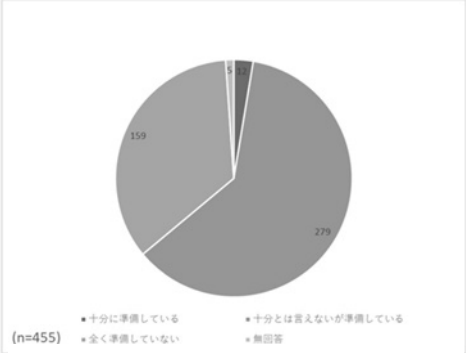

図９：防災グッズの準備状況

防災意識に関する調査では、水害が予想される地域であるため、住民の危機感が見受けられたが、依然として災害に対する準備や情報の収集が行えていない世帯も存在した。いつ起きるかわからない災害に備えてより早急な情報提供と避難場所の再検討を行う必要があるといえるであろう。

（４）子どもの遊び場

新堅町地区は少子高齢化が激しく進む地域である。その中で、子どもの存在は地域が受け継がれていくためにも重要なファクターである。まず、子供の遊び場に対する住民の考える充実度についての結果を図 10 に示す。「とても充実している」及び「充実している」と回答した人は全体で 4.2%しかいなかった。また、「あまり充実していない」及び「全く

充実していない」と回答した人は全体の 61.9%にも及んだ。よって新堅町地区においては子供の遊び場がかなり不足しているという現状が確認された。

次に新堅町地区が子供のための施設を増やすことに対する賛否の意見を調査した結果を図 11 に示す。「賛成する」と回答した人は全体の 64.1%、「反対する」と回答した人が全体のわずか 2.1%であり、多くの人が子供のための施設を作ることに前向きな考えを示した。また、子供のための施設の増設についての反対理由では「子どもが少ないため無駄である」という意見や「これから子どもが増えると思えない」という意見が挙がった。

図 10：遊び場の充実度

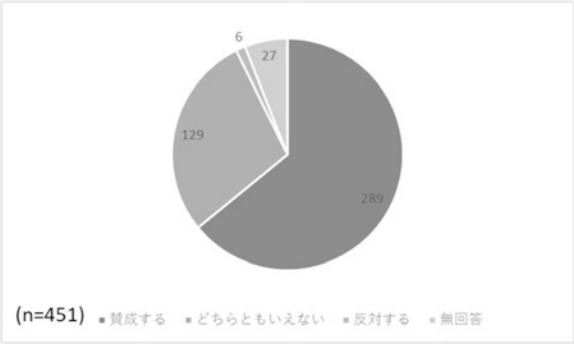

図 11：子どもの施設を作ることの賛否

最後に、新堅町地区が子どもにとって遊びやすい街になるために何が必要であると考えるかについて調査したものを表 3 に示す。これは自由記述形式で調査し265件の回答を得た。「公園・広場」という意見が圧倒的に多く全体の 51.7%であった。その他の意見としては「安全な場所」や「大人の働きかけ」、「小学校の跡地の活用」が多くの回答を集めた。現在新堅町地区には公園がなく、子どもが外で自由に遊べる場所はない。この状況に大人たちも何らかの不安感を抱いている人が多いことが分かった。

表４：子どもが遊びやすい街になるために必要なもの

必要なもの	件数	必要なもの	件数
公園・広場	137	自然	2
安全な場所	35	若い夫婦	2
大人の働きかけ	19	広い場所	1
小学校の跡地利用	14	道路の整備	1
遊び場	11	若い世代の意思	1
子どもを増やす	11	創造性のある遊び道具	1
屋内広場	9	商業施設内の子どもの遊び場	1
多目的施設	4	地域コミュニティの活性化	1
児童館	4	タテマチストリートの車の通行禁止	1
空き家の改修	3	歩道の整備	1
子育て支援	3	県立工業高校の移転	1
支援団体	3		

この調査では新堅町地区の人々は子どもの住みやすい環境づくりに賛成しているものの、その状況は未だ完成とは程遠い。商業施設と住宅が密集する新堅町地区で、子供のための施設を作り出して子どもが多いまちを実現するためには、安全性と場所の確保の両者を備えた工夫が必要であると考えられる。

（５）新竪町地区の観光地化

新竪町地区の住民が観光から得ている利益を調査した結果を図 12 に示した。「特になし」以外を選んだ住民、すなわち何らかの利益を受けていると回答した人は全体の 19.4%であった。観光地が近いにもかかわらず、実際に地区周辺の観光業に携わる人はあまりいないということ、観光客が増えたことによる店の増加や活気の増加を感じている住民がそれほどいないということが分かった。

次に新竪町地区は魅力的な観光地であると思うかどうかについての調査結果を図 13 に示した。観光に対して積極的な意思を示す「魅力的だと思う」及び「やや魅力的であると思う」と回答した人は全体の 38.1%であるという結果になった。一方、観光に対して消極的な意思を示している「あまり魅力的だと思わない」及び「魅力的だと思わない」と回答した人は 31.1%という結果になった。新竪町地区の観光に対して積極的な意見の方がやや多かったが、消極的な意見もほぼ同規模ででているため、観光を進めるならば住民の意見をより取り入れていく必要があると考えられる。

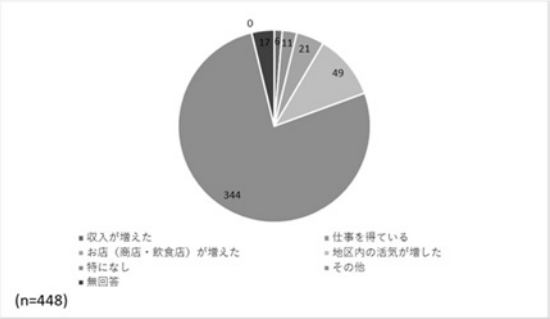

図 12：観光から得ている住民の利益

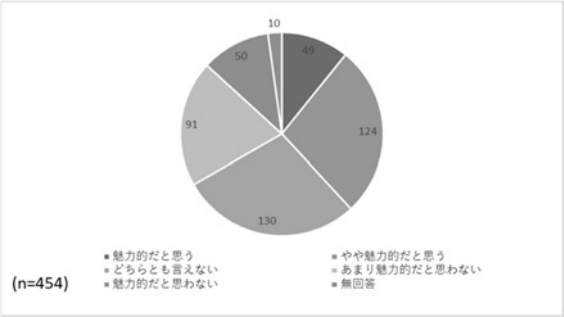

図 13：観光地としての新竪町地区の魅力

新竪町地区の観光振興による影響についてプラスの影響とマイナスの影響についてそれぞれ調査した。結果は表 5 に示す。この項目は自由記述方式で調査しており有効回答数はプラスの影響については 150 件、マイナスの影響については 172 件であった。まず、プラスの影響として 1 番多かったのは、観光客の増加による「地区の賑わいの創出」であり、圧倒的に多い 114 件あがった。次に「経済的な利益の創出」が 13 件、「知名度の増加」及び「外国人の増加」が 7 件、「施設や景観が整う」が 6 件、「住んでいて楽しみが増える」が 3 件であった。マイナスの影響としては「治安の悪化」が 42 件と最も多く、次いで「ゴミの問題」が 36 件、「交通トラブル」が 31 件、「騒音問題」が 21 件、「住みにくさ」が 17 件、「外国人とのトラブル」が 7 件、「宿泊施設の増加」が 6 件であった。マイナスの意見として共通していたのは、新竪町地区の良さである静かさや昔ながらの景観が阻害される恐れがあるということである。新竪町地区は高齢者が多く居住歴が長い住民が多いため、外部の人が多く出入りすることに不信感を覚える人も少なくないように捉えることができた。よって住民と観光客が交わらない空間も創出していくことが重要であるといえる。

最後に新竪町地区の観光への住民の思いを図14に示した。「更に観光客を増やしたい」

と回答した人は全体の24.7%、「現状を維持したい」が60.4%、「観光客が減ってほしい」が7.9%であった。この結果から、観光に前向きな意見が多いことが分かったが、現状維持を支持する人が圧倒的に多いことから、東京オリンピックによる観光地としての日本の知名度の上昇を受け、これ以上観光客が増えた場合の対策を考えておく必要があるとわかる。

観光に関する調査においては、観光客の増加による直接の利益を得ていると回答した人は僅かであったものの、現状の観光に満足している人が多いことが分かった。これは地域の人通りの増加による賑わいが増えたことなどが起因していると考えられる。一方で現時点の観光客の入り込み状況においても、交通の混雑などが発生しており、住宅地まで混雑が入り込まない仕組みづくりが必要である。また、観光客によるゴミや治安問題も地区内だけの問題ではなく市域や県域レベルで規律していく必要のある問題であるため、住民の暮らしを守る対策を期待したい。

表６：新竪町地区における観光の影響

プラスの影響	件数	マイナスの影響	件数
地区の賑わいの創出	114	治安の悪化	42
経済的な利益の創出	13	ゴミの問題	36
知名度の増加	7	交通トラブル	31
外国人の増加	7	騒音問題	21
施設や景観が整う	6	住みにくさ	17
住んでいて楽しみが増える	3	景観の悪化	12
		外国人とのトラブル	7
		宿泊施設の増加	6

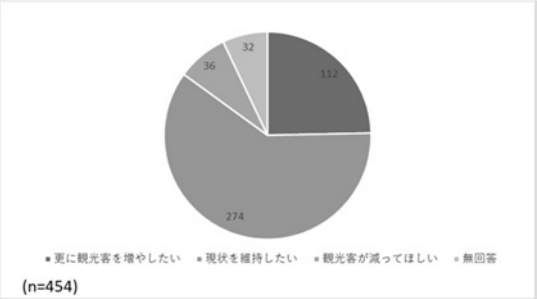

図 14：観光客増減に対する住民の意識

（６）新竪町地区の公共施設

公共施設の見直しによって生まれる効果に期待することを調査したものの結果を図15に示す。「身の丈にあった公共施設料の維持」及び「施設の多目的利用による地域交流やふれあいの増大」、「安全で快適な施設の提供」、「便利で効率的なサービスの提供」がそれほど大きな差をつけることなく票を集めた。よって、現在ある公共施設において住民が共通して認識するような欠陥があるわけではないということが分かった。

次に新竪町地区内で新しい公共施設を作るとしたら、どのような施設を望むかについて調査した結果を表７に示した。「交流施設」が48件、「体を動かせる施設」が40件とこの2つの回答者が圧倒的に多かった。現在、新竪町地区には公園や体育館など体を動かせる場がないことがこの結果に結びついたと考えられる。また「図書館」が27件と比較的回答者数が多いが、これは石川県立図書館が移転されることに伴って必要と考える人が増えたと考えることができる。新竪町地区は文化施設が豊富で、そのような文化施設で時間を過ごす人も比較的多かった。そのため、図書館移転後の住民が気軽に過ごすことができる文化施設の必要性は非常に大きいと考える。「子供のための施設」は21件挙げられており、近年の地区内の少子化対策や子どもが遊ぶことができる場所がないことを問題視していることがわかる。「防災施設」は12件あり、犀川の氾濫による水害が予想される新竪町地区の

地理的な問題からきていると読み取ることができる。

このように公共施設の調査においては、住民同士が交流できる場が最も必要とされており、また、狭い地区内でも大人や子どもが体をつかって時間を過ごすことができる施設の需要もあることが分かった。そして、県立図書館の移転が住民に大きな影響を与えていることが分かった。様々な施設が老朽化しており、ここからさらなる改築や移転が予想される中で、住民の意見を少しでも反映できる体制づくりが必要であると考える。

図 15：公共施設の見直しに期待すること

表７：住民が求める公共施設

施設名	件数
交流施設	48
体を動かせる施設	40
図書館	27
公園・広場	25
子供のための施設	21
防災施設	12
温泉・銭湯	10

４．まとめ

（１）本研究の成果

新堅町地区における住みよいまちづくりのためのアンケート調査において、現状においては、市の中心地であることから交通の利便性に住民が満足していることや、治安の良さや地区の静かさに満足している人が多いことが分かった。また買い物の不便さは多くの住民が不満を持っている状況であり、車を使って狭い道路を通って日常の買い物をしなければならない状況であることが分かった。また全体的に子どもが遊ぶことができる場所や施設がなく多くの住民がそのような施設を作ることに前向きであることが分かった。観光については現状の観光客数に満足しており、これ以上を望まない人が多いという結果が出た。これは新堅町地区の良さである静かさが阻害されたり、治安の悪化を懸念することが原因と考えられる。そして公共施設については住民の交流の場の需要が多く、また、県立図書館の移転は住民にとって重要な文化施設の喪失となっていることが分かった。

よって新堅町地区のまちづくりにおいては、住民と観光客の行動する場所をわけることや、子どもが自由に遊ぶことができる交流施設の創出などが必要となるだろう。

（２）今後に向けて

本論の調査において，観光者が増加している地域のおける住民の問題意識が整理された。

今後，公共施設の移転や跡地の開発が予想される中，地域の将来像を共有し，これらの問題を解決することが重要となる。加えて本調査では地域の住民へのアンケート調査を実施したが，観光に関わる事業者の意向を把握し，全体でプロジェクトを必要もある。これらを踏まえ，2020 年 4 月より新竪町地区未来像づくり事業として，共同研究により上記課題に取り組む予定である。

参考・引用文献

１）金沢市ホームページ「小学校通学区域別人口・世帯数【改正後】、平成 31 年（2019 年）資料」, https://www4.city.kanazawa.lg.jp/11018/toukeidatasyu/syougakkou_2.html（最終閲覧 2020 年 1 月 13 日）

２）金沢市ホームページ「 住民基本台帳人口・世帯数の推移（毎月初日）【改正後】、平成 31 年（2019 年）資料」,
https://www4.city.kanazawa.lg.jp/11018/toukeidatasyu/jinnkousetaisu.html （最終閲覧 2020 年 1 月 13 日）

３）新竪町公民館創立五十周年記念誌編集委員会（2003）、「新竪町公民館創立五十周年記念誌「しんたて」」、金沢市新竪町公民館、p.233-250

４）「金沢市観光調査結果報告書(2018)」、pp.22
https://www4.city.kanazawa.lg.jp/data/open/cnt/3/14897/6/kankou-chousa2018-syuusei.pdf?20191029132748（最終閲覧2020年1月13日）